



清瀬の杜

令和5年1月号
令和5年1月10日
校長 佐藤 明子

<http://www.kiyose.ed.jp/kiyosetyuugakkou/index.html>



自助と共助

～防災教育を《命の週間》で取り組むにあたって～

校長 佐藤 明子

明けましておめでとうございます。今年は、穏やかな天候に恵まれ、皆様におかれましては、和やかな新年を迎えられたことと思います。昨年中もコロナ禍にある学校運営を続行していく中で、いろいろな場面で、保護者や地域の方々にお力添えいただき、心より感謝申し上げます。今年も本校の教育活動の一層の充実と発展に努めてまいりますので、引き続き、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

1月15日から21日は、『防災とボランティア週間』です。1995年1月17日明け方に発生した『阪神・淡路大震災』がきっかけで創設されました。現在でこそ、ボランティアは、誰もが行動する社会貢献活動になりましたが、28年前当時は、聞きなれない言葉であり、特別な市民活動のようにイメージされていました。したがって、阪神・淡路大震災で多くの市民が災害ボランティアとして参加したことは、被災者を救済しただけでなく、誰でもできる社会貢献を価値あるものに変えた重要な活動となりました。そしてこれを機に1995年を、‘ボランティア元年’と呼ぶようになりました。

またその後、2011年に私たちは、東日本大震災を経験し、一人ひとりが日常における安全への取組をはじめ、生きることの意義など、急速な社会の変化で見落としがちなものを見つめ直すことになりました。特に、この大震災では、被災された多くの学校や地域社会において、代え難い命を救ったのは、子供たち自身の判断と素早い行動であったことが明らかになりました。

東日本大震災前、学校の避難訓練の多くは、放送をよく聞き、指示に基づいて安全に避難することが重点であり、避難の過程では、自ら考え判断することは、強く求められない状況にありました。しかし、震災が発生すると、停電で避難放送もできず、地震により火災や津波などの二次被害も予測をはるかに上回って通常の避難方法や避難場所が確保できない等の問題点も浮かび上がりました。

そのような中、岩手県釜石市の学校の子供がとった行動―「誰からの指示もなく一人で自宅から避難場所に避難した」、「揺れが収まっても避難しない家族を説得して一緒に避難した」、「避難場所を巡って意見を交わして安全を優先してグループで高台に避難した」など、日常の避難訓練で学んだことを生かして身に付けた主体的な判断と行動が、自分の命だけでなく、周りの多くの命を救ったといわれています。

知識としての‘安全’を受け身としてではなく、自分の命を守り、さらに社会の一員として意識して行動する「助けられる人から助ける人へ」の転換が、一人では生きることができない人間にとって、私たちの生き方そのものにも通じるものになったのではないかと感じます。

3学期の命の週間の11日(水)には、防災教育講演会を設定しました。年末に、防災・減災に関する意識調査を、全校生徒対象に行いました。11日は、その調査内容をもとに、神戸市の人と防災未来センターの研究員の方より、先進的に防災教育に取り組んでいる学校の事例を含めての講演をしていただきます。この機会を通じて、生徒たちには、自助<自分の命は自分で守る>、共助<地域の安全はみんなで守る>について深く考えさせ、防災・減災の取組が推進されるようになってほしいと願っています。ご家庭におかれましても、学んだことが学校だけでなく、生活の拠点で行われることを踏まえて、話題にさせていただきたく存じます。

清瀬市の防災・危機管理についてご存じですか

災害から自分の命や大切な人を守るためには、日頃からの備えと発生時の冷静な判断と素早い行動が不可欠です。いざという時の集合場所や家庭の備蓄等、ご家族でぜひご確認ください。

参考：清瀬市 HP https://www.city.kiyose.lg.jp/kurashi/bousai_anzen/bousai_kiki/1003335/1003355.html

